

## 倉橋先生を語る

平井信義



### はじめに

うことは、非常に悲しい現実だと思います。これが保育界の児童不在の状況を作ってしまっているのではないかと思われます。

倉橋先生は、非常に偉大な存在がありました。それだけに、先生のおっしゃることやお書きになっていることが、どのくらい皆さん方にしみこんでいるかということがまた問題であると思います。できれば、先生のお考えを充分に体得してた方々が、保育実践の中で、こういうふうに「先生の思想が伝えられているのだ」と明確化して、若い人々に伝えて行く必要があるのでないかと思います。

倉橋先生につきましては、現在の保育界には悲しい現象がございます。保育に関するいろいろな講習会で、私が、倉橋先生のお名前を知っている方は手をあげてくださいとお願いいたしますと、大体一割ぐらいの方しか手をあげないのでござります。さうに「倉橋先生のお書きになつたものをお読みになつた方がありますか」とうかがいますと、さらに半分ぐらいになつてしまいます。私は、「倉橋先生の書かれた本を読んでいないような保育者や幼児教育に関係している人は、保育界のもぐりである」と思っていますし、そう言つてもおります。日本の保育に関係している人が、日本のフレーベルといわれる倉橋先生を知っていないとい

### 倉橋先生との出会い

私自身、大変恥ずかしいことに、倉橋先生の偉大さがわかりま

せんでした。最初にお会いいたしましたのは、忘れもしない昭和十五年でございます。その時に先生からおつやられた言葉の精神が、だんだんあとになつてわかつてきましたのであります。その時は、反発したり笑つて終わつてしまつた先生のお言葉が、あとになって、意外に大事なことであるとわかるようになつたのであります。

私の家内も先生から教えをうけたのであります。今回の講演の資料としていたいと思い、どれほど倉橋先生の思想が残っているのかとためしてみますと、意外にもはつきりした形では何も残つてないであります。大変に不勉強であったということが(笑い)わかった反面、大変に本質をつかみにくかった面があるようにも思えるのであります。家内がひたすら伺つたことは、「自主性、自主性、自主性」というお言葉で、それ以外は覚えていないとい

うのです。実はあまり先生の講義をきいたことはないのですが、ここにお集りの方々の中には、恐らく何人か、先生からたつぶり講義をおききになつた方がおありになると思います。そのノートを拝見したいと思っておりますが、しかしノートがとれないような講義をなさつていらしたのではあるまいかとも思います。先生と話をしておりますと、いつも、どこまでが本当なのか真面目なのかわからないような話で、ただうつかりしていると先生の笑

顔に誘われて、ゲラゲラ笑つておしまいになつてしまふ。ま、こういうような風格があつたように、解されるわけです。

先ほど、山下先生から、昭和二十三年の第一回の保育学会の時のこの会場でのお話を出ましたが、ちょうど先生はピアノの前にすわつておられました。私はおそれ多くて近寄りがたい感じでおりましたし、現実もそうでありました。私自身が先生からお親しくしていただきお話をができるようになりましたのは昭和二十四年以降、おなくなりになるまでの七、八年間でございました。これは大変ラッキーなことでしたが、先生のお宅が中野千光町という所にございまして、私の家から歩いても二十分ぐらいの所にありました。初めて先生からお電話をいただいたのが「幼児の教育」に私に原稿を書いてほしいというご依頼がありました時だったと思うのです。

私が初めて先生とお会いしましたのは昭和十五年。ちょうど、私が大学の学生として、岡部弥太郎先生、(児童心理の教授)のセミナーに出ておりました時に、ここの中高師附属幼稚園を見学したいということでお紹介いただき、ここを見学させていただいだのがきっかけであります。何人でうかがつたか覚えておりませんが、園長室に入つて参りましたら、先生は怒つたような顔をしておられまして、いきなり「今日は、心理学を全部忘れてくれた

まえ」とおっしゃったのです。私のその時の感情を率直に申しますと、『いやなおやじだなあ』と思ったのです。いきなり怒られてしまつて、とりつくしまがないオヤジー——という印象でした。先生はすでに日本の幼児教育界の一番の大黒柱であつて、私どもから見ればおそれ多い方だったのですが、ともかく最初の印象がすごく悪くて、そのあとのことは覚えていないくらいであります。

### 『心理学を忘れる』

ところが、その後だんだんと先生のお言葉が、私の頭の中にきちつとおさまるようになってきたのであります。私は大変ありがたいことに、昭和二十二年、愛育研究所附属の保育所に、園医と一緒に形で参加しました。当時は建物がありませんでしたから、野外保育という形から保育というものに親しませていただいたわけであります。そこから幼稚園や保育所を対象としていろいろな研究を始めたのですが、だんだんに自分がやつてきました研究がいやになりました。どうも子ども不在のにせ物が多いように感じ始めたのです。自分としても自分の研究がふにおちない、と思うようになりました。その時以来、倉橋先生の『心理学を忘れよ』というお言葉が私の胸の中におさまるようになったのです。

先生のお言葉を援助して下さったのが、保育所の、今は亡くなられましたが、秋田美子先生です。この先生は、私の研究に対し非常に示唆に富んだお言葉を下さったのです。私は自分の研究の結果が出来ますと、お礼の意味もかねて、幼稚園や保育所へご報告にあがることにしていました。そうしますと、多くの園では、『ご立派なものができました』というような顔をして見て下さったのですが、秋田先生だけは、

### 『平井先生、これ本当に子どもなの?』

とはつきりおっしゃつたのです。初めは、腹が立ちました。まだ若くて、髪も黒くて血氣にはやつておりましたから……。秋田先生が同時にいつもおっしゃつて下さつたことは、

### 『子どもと遊んでみてちょうだいよ』

でした。このお言葉がどこから出たかといいますと、これはやはり倉橋先生の、一番基本となるお考えなのです。子どもと遊んで、そこからくる体験、それを大事にしてほしい、ということなのです。

このお茶の水女子大に児童学科ができました時の先生の構想、これは、その当時愛育研究所の小児保健部長でいらした斎藤文雄先生から直接に私がうかがついた話ですが、最初は、児童学部を作るという大きな構想だったと思うのです。それが縮少され

児童学科となつたいきさつを斎藤先生から聞かせていただきまし  
た。また、倉橋先生の児童学科の構想は、少なくとも最初の一年  
間は完全講義なしで、学生は子どもと直接にぶつかる体験をし  
て、自分の目で子どもをたしかめるという構想であったのであり  
ます。しかしこれのように文部省で定められました教育課程と  
いうものがありまして、内容はともかく、単位をとらなければい  
けないということで実習一年間という先生のご構想はくずれてしま  
ったのです。結局は理論が先にきて、頭でっかちで目の曇ったた  
見方をする学生がふえ、子どもと本当にぶつかる体験の少ない学  
生を作るような状況になってしましました。倉橋先生が最初にお  
つしやつたような、一年間子どもにぶつかってといふことが、  
"心理学を忘れよ" ということの一つの方法だろうと思します。

私も今保育者養成をやっておりまして、何とか倉橋先生のお考  
えにそつていきたいと思っています。私が思いますのに、いった  
い児童心理学あるいは幼児心理学といふものは、本当に子どもを  
見る目を養っているか、ということなのです。これは、歴史的な  
経過として当然なると思ってお話ししているのですが、どうし  
ても研究の最初は平均心理学なのであります。何歳の子どもがこ  
うであるという一般的なことを教えてはいても、目の前の子ども  
を理解する方法につながるものではありません。目の前にいるひ

とりひとりの子どもは、皆違った心をもつてゐる。それをただ三  
歳はこれこれのことができる、という知識でもって見てしまう、  
そしてああそうかななど納得する。こういう理解の仕方では、目の  
前の子どもの心は伝わって来ないのである。これに対して倉橋先生  
は批判的でいらしたのです。

### 保育の科学性

それからこれは、私どもに大変大きな責任があると思うのです  
が、どうしても問題児の仕事をしておりますと、子どもが指をし  
やぶつてゐるだけでも問題児だとしてしまって、というふうな（こ  
れはとくに終戦後のアメリカの影響が顕著にあります）そういう  
病理的な観点が児童教育の中に入つてしまつた。この点に  
ついて倉橋先生がどういうふうに考えていらしたか全くわからな  
いのですが、先生のお言葉から私が私なりに考えさせていただい  
たところによりますと、いわゆる病理的な観点は、多分に精神分  
析学の影響をうけた心理学に根ざすものであり、これにこだわっ  
ているところに問題があると思うのであります。

これは余談ですが、私どもは終戦後、アメリカの影響をうけま  
して、育児学や保育学を発達させました。終戦後、アメリカのも  
のを読んでみますと、日本のがおばあさん育児であり、非科学的

に思え、本当に情ないような気がいたしました。これでは大変だ、科学的な育児にしなければいけない、と実は私が最初に出版いたしました本が“楽しい育児科学”で、「科学」という言葉を使つたわけです。しかしこの科学というものが、本当に子どもに即していなかった。ただ従来の児童心理学や身体発育に関する研究の紹介に過ぎず、そういう点では実はむしろ危険性をもつているところになると思ひ返されるのです。

アメリカの育児学が入つてきましたとき、私たちがいち早く気になつたのは、いわゆるチュウチュウペイペイと昔いました、おしゃぶりのことです。その当時、赤ん坊が泣きますとくわえさせていたものです。このころはあまり売つてませんので若い方はご存知でしょうか？ アメリカの育児学では乳首は不潔であるといつて全く使われていないということでありましたので、私どももいろいろな本に、乳首は不潔である——と書きました。乳首をとつて見ますと、今度はおしゃぶりが盛んに見られるようになりました。このおしゃぶりは精神分析学からいえば、くちびるの性欲が満たされていない、欲求不満であるという説明がありますので、今度はおしゃぶりは悪いというようになりました。

私はちょうどそのあと、昭和三十年、昭和三十一年と西ドイツへ行きました。行って見ますと、病院でも平気でおしゃぶりを使つ

ています。赤ちゃんが泣きますね、そうすると看護婦さんがおしゃぶりを口の中に入れられます。入院している子どもでも、かなり数の子どもがこのチュウチュウペイペイを吸つてゐるんです。私は、アメリカの育児の方が進んでいると思っていたのですが、婦長さんに“こういうものは日本では使つておりません”といいました。“もはや使つていません”と言えばよかつたのに、言葉がうまく言えないで、日本にはないと聞こえたらしく、翌朝一ダースほど買つてきてくれました。結局は捨ててきたようなわけです。（笑い）

いま私の申し上げたいことは、いろいろな科学が外国から移入されてきた時に、よく吟味しなければならないということです。いつたそとはどういう基本的な考え方があるのか、本当に子どもの本質に即して解釈が下されているのかどうかということをよく検討した上で、それを取り入れなければいけない、ということです。保育界にしてもたえず外国のものに振り回されている。たとえば絵の指導について、古い方はよくご存知だと思いますが、創造美育派が一時非常に盛んになりました。保育界は創美一色になつたことがあります。流行があったときには、常にわれわれの保育経験の中から、本当に子どもにとってそれがよいかどうかと、いうことを十分に検討しなければいけないと思います。これにつ

いて、私たち学問をやっている者にも大きな責任があると思います。日本の学問や科学は、残念ながら外国のものなら何でもよいこととして、それを早くとり入れようとする状況にあります。これは明治以来の外国崇拜の名残がまだわれわれの中に残っているからであります。外国の話をすればすぐにこけおどしができるくらいに、研究者の報告の中には外国人の名前が出てきます。日本で非常にいい仕事をしてもその業績は認められなかつたり、忘れられてしまします。私が冒頭に申上げましたが、日本の保育者や幼児教育にたずさわる者の中で、倉橋先生の本をお読みにならない方はもぐりだということは、そのことを意味します。

今申し上げましたように、日本における保育の科学をどうしていくか。これは保育を研究する方法論の問題です。昨年も今年も、日本保育学会において、その点についてのシンポジウムが行わされました。今後の新しい保育をめざしていくに研究すべきかについては、もっと討論されなければならないと思います。

### 知能テスト

その点でこの三十年を振り返って見ますと、幼児を研究している人というのは、昭和三十五年ごろまでは本当に数えるほどしかありませんでした。山下俊郎先生、城戸幡太郎先生、あるいは波

多野完治先生などが、幼児に関係した研究をしておられました。が、倉橋先生ほど子どもに体当りして研究された方は少なく、その影響は昭和二十年台まで残っていました。それが昭和三十五年以後、学童の研究をしておられた心理学者が、どういうわけかどーっと幼児を対象に研究するようになって、そのころから「テスト」あるいは「評価法」が言われるようになりました。たとえば、子どもの行動評価の表ができる、先生がそれに○をつけ「いい子」であるとか「悪い子」であるとか評価することが憶面もなぐされるようになつたのであります。『憶面もなく』と私は悪口を申しますが、本当に幼児とぶつかつて、幼児を知つてゐる人が作つたのでなく、やはり学童を対象として行われていたものを、年齢をおろしたものにすぎないと私は考えております。また、そこから、「幼児の知能テスト」という言葉が、これもまた憶面もなく使われるようになります。私は昭和二十二年から赤ん坊の保育をやっており、愛育会で乳児室を担当して、七年間もそこで研究をしておりました。日本で初めて幼児向きのテストを作らねましたのは牛島義友先生であります。しかしその際はつきりとおつしやいましたのは「精神発達」ではあるが知能テストではない——ということであります。その点で私が失敗しましたのは、たしか昭和二十八年だったと思うのですが、学会で、うつかり

"幼児のIQは"といつてしまつたのです。"DQ"といえば間違ひはなかつたのですが、"IQ"といったばかりに、先輩から「君は知能というのをどう考へてゐるのか」と質問されたのです。私はつい言葉がすべて間違えたのだ"といつたことをまささと

思い出します。もし"幼児の知能テスト"という言葉を使つていれば、幼児を知らない人だと判断してもいいと思ひます。知能テストを受けたたくさんの子どもが科学性という名目において、誤った判断や指導をうけてしまつてゐるという現状あります。幼児の知能テストをうけてIQが低いといわれた子どもと一緒に遊んでみると、非常にたくさんのいい面をもつてゐることがしばしばです。したがつて私たち保育に携わるものは、知能テストとはどういう性質のものか、科学性というのは一体どういうことなのか——を問い合わせなければならないと思ひます。うつかり科学的なデータというものが出てきますと、私どもが本当に子どもを見る目を失つてしまします。"IQが低い"といわれたその子どもに対する、能力の低い子どもとして、本当の力を見ようとしている保育者さえもいるのです。

そういう点で、倉橋先生がおっしゃつて下さいました"心理学を忘れよ"という言葉は今後の保育の科学を確立する上で、研究者はもちろんのこと、実践者である保育者も、心のともしびとし

ていなければならぬと思ひます。本当に、科学的に、客観的に子どもを研究するには、どういう方法を用いればよいか、それだけよいのかについては、なお検討の必要があると思ひます。

#### 保育者と直感

従来の科学は、客観的でなければならないという意味で、主観的な面を排除してきました。そしてできるだけ客観的にデータを出す、という方法をとつてゐます。しかし、本当に幼児と接觸してきた人たちは、直感というものを非常に大事にしています。直感には、本当に子どもと接する体験を積み重ねる中から生まれた澄んだ"目"があります。

倉橋先生の書かれたものを読みますと、非常に直観的ですが、われわれにハッとするものが非常にたくさんあります。たとえば"生活を生活で生活へ"というお言葉の中にもそれがあります。子どもと接觸の少ない人には、これはいったい何だろうと思ひでしよう。しかしほんとに子どもと接觸した人には、ハッとすることがあります。そういうお言葉が、倉橋先生の口から飛び出でく

るのです。"育ての心"をはじめその他の本にしましても、本当に子どもと接した人には、しみじみと心を打たれるものがずい分たくさんあります。私にも最初のころはわからなかつたが、こ

のところになつてわかつてきたものもあるわけです。つまり、直感というものを私たちはどういうふうに考え、大切にしていくかということです。この点をさらに私に教えて下さったのは、アルガー先生です。ウイーン大学の小児科の教授で、四十年にわたって自閉児の研究をつづけてきた方ですが、直観という言葉がたくさんに使われます。

この直感についてさらに具体的に教えて下さったのは、皆さんの方の先輩であり、保育者であります。その方々は、「子どもと接する時には、子どもの目の高さになりなさい」ということをおっしゃいました。しかし、近ごろは、ある古い保育者がいつていらしたことですが、「このごろの若い先生っていっては、大根足ばつかり見せてるのよ」ということです。つまり、立ったまま子どもとの相手をしている先生が多いということです。子どもの目の高さになるということは、子どものまなざしから子どもの感情を汲む非常によい方法です。子どもの情緒的な反応が理解できるのです。人間と人間の付き合いの中には、目と目の付き合いがあり、それは言葉の付き合い以上に重要です。今も私は皆さまの目を見て話をしていますし、皆さまも私の目を見ていて下さると思います。今日は、マスエジュケーションのために、おひとりおひとりがよくわかりませんが、輝いている目もあります。もうやめてく

れという（笑い）目もあります。あるいはねむけがきているとか、いろいろな心の動きが目に現われてきているわけです。

子どもとは、言葉以上に目でつきあっているわけです。赤ん坊が大体そうです。赤ん坊は非常によく相手の目を見ます。自閉の子どもは目を見てくれないので、意志の疎通が困難です。目をよく見て、そこで相手が怒っているか、悲しんでいるか、楽しんでいるのかを汲みとっているわけです。表情では、ある程度ごまかすことができます。しかし、まなざしだけはごまかすことができません。昔の保育者って偉かったなあ」と思うのは、目と目の付き合いをしていたということです。このごろの保育者は目なんか見てしません。そっぽ向いて自分のやりたいことだけをどんどん運んで、保育を終わってしまいます。そのような保育者は大声で言葉をかけることが多いのですから、だんだん声がられて、職業病だなどとおっしゃつたり……。

子どもに向かってかける言葉については、テープレコーダーといういいものがありますから、それに自分の保育を吹き込んでごらんになって、いかに無駄口が多いか、厚かましい言葉を使っているかについて、反省してみてほしいと思っております。

## いい保育

その点で、倉橋先生は、大変大事なことをおっしゃっていま  
す。それは、先生が前に出て大きな声を出している保育はいい保  
育ではない——ということです。私が先生のお宅へうかがった時  
に、"一番いい保育っていうのは、保育者の存在がわからない保  
育だよ"とおっしゃったのを思い出します。子どもたちがいきい  
きと活動していて、保育者がどこにいるかわからない保育だよと  
おっしゃったのです。どのような時にうかがったのかは思い出せ  
ないので、この言葉は非常によく私の心に残っています。

恐らく私が倉橋先生のところへ通い出した初めのころだったと思  
います。

実は、二、三回そういう保育を見ました。保育者がいるのかい  
ないのかわからないのですが、子どもが実に生き生きと活動して  
いるのです。生き生きとして活動している、というのは、どうい  
うふうに表現したらいいかわからないのですが、直感的に言いま  
すと、芸術作品みたいなものです。子ども一人一人の目が、表情  
が、あるいは手足の動かし方のすべてが、自分を表現していると  
いう状態です。私はそれを見た時に、涙がじーんと出てきたのを  
思い出します。

ともかく倉橋先生は、子どもに即して、子どもの心をよく汲む  
ということを、強調されておられました。私は、先生のご意図に  
あうかどうかと思いながらこの言葉を使うのですが、共感的理  
解、という言葉を使っております。とくに私どもが問題児を扱う  
時には、まず、子どもの感情を汲む必要があります。そうしなけ  
れば子どもと親しい関係は作れません。ですから、いつも、まな  
ざしや、表情や、あるいは、ちょっとした手足の動かし方を見て  
いて、その子が私と接触したいなという気持ちのわいた時に、手  
を差しのべるのです。その気持ちがわいててしない時に手を差し  
のべても、引込んでしまいます。つまり、子どものまなざしや表  
情からうけとる感情が大切なのです。人間というのは口ではいろ  
いろ理屈をいっていますが、その根底では感情的なつきあい方を  
しているものです。ある人と会ってあとに残る非常にいい感情、  
あるいは口では何とかうまくいったけれども、あとに残る不愉快  
な感情など、人間関係の基盤となるものは感情であります。  
これは、そろそろ倉橋先生のお体の具合が悪くおなりになつた  
ころのことです。時々耳に水がたまりまして、聞こえが悪いとい  
うところのことでした。お宅にうかがいますと、"平井さん、子ど  
もっておもしろいですよね、朝来た時にね、『園長先生おはよう  
ございます』っていう子もあるしね、ちょちょちょつてつづつい

ていく子どももあるし、赤んべをしていく子どももありますね」と、ただそれだけを言わされたのです。私は聞き流していたのです  
が帰り道で、今おっしゃったことはどういう意味をもつているのかなあと考えました。そして、その時々の子どもの表現を大事に  
しなさいとおっしゃって下さったのかなと思いました。子どもが  
挨拶をするときには、形をととのえて『おはようございます』とい  
うかもしれない。あるいは、ようやく先生と親しみが出てきて、  
ちゅんちゅんとついて行く子もある。あるいはかなり親しみが  
できて赤んべえなどをする時期の子どももいる。「それぞれの子  
どもの表現を大事にせよ」ということかな、と私は考えました。  
子どもとの朝の出会いを、先生は非常に大切にされていました。  
すなわち、保育者は、朝子どもを迎へなければならぬ。そ  
して『おはよう』と先生の方から声をかけてほしい。その時に子  
どもの方からいろいろな反応がある。それを大切にしながら、だ  
んだんにそれぞれの子どもがおはようございますという行動的型  
を学習していくようになる。それでいい。——こういうことを教  
えて下さったのではないかと思ったのであります。

先生は何度か『保育者は子どもより先に行つていなければいけ  
ない』そして『待つていいなさい』ということをおっしゃっていら  
しゃいました。今は組合がありますから時間の決まりがあつて仕

方がないのですが、ともかく、朝は子どもより先に行って、「出  
会い」の瞬間から心の結びつきができる、それが一日の流れとな  
って子どもは安定します。そして、自分の力を十分に出します。  
そこに誘導保育のよさが現われるのではないかと思うのでありま  
す。

この「出会い」の重要性を本当に私が知ったのは、実は、自閉  
の子どもです。自閉の子どもというのは、私が遊戯室で、その子  
どもが入つて来るのを心から待ちうけていないと、その日はずれ  
てしまうのです。本当に待つていたんだよ、と心をこめている  
と、自閉児は私の顔を見た途端にパッと胸に飛び込んでくれると  
いうことを体験しました。ですから自閉の子どもと会う時には、  
私の心の状態を余程いい条件にしておかなければいけません。子  
どもは、自閉の子に限らず、すべてそうだと思います。

倉橋先生は朝の出会いとともに、遊具のことについておっしゃ  
ったことがあります。子どもというのは、『園にいったらやりた  
い!』という遊びを頭に描いて登園して来る。やりたい遊びでい  
っぱいの子どもは、上靴にはきかえると脇目をふらず——です  
ね。私が通つても、棒が歩いてると同じです。(笑い)『お  
はよう』つていつたつて、関係ないような顔をして、たあつと遊  
具の所へ行つてしまふこともあります。つまり、子どもが頭に描

いでいる遊びの心を大切にする。それには、遊具の配置をよく考  
えておかなければいけないとおっしゃったのではないかと解釈を  
しております。ですから朝の出会いは、子どもを集めておはよう  
を言わせることから始まるというふうなものではない。これが倉  
橋先生の自由遊びを中心とした誘導保育の第一段であると思いま  
す。

それからもう一つ。“お帰り”が非常に大事だということを  
教えていたいたいのです。「またあしたね」といつて、本当にあ  
したの再会を約束することによって、翌日の子どもの園に対する  
期待が強くなるということを教えていたいたいことがあります。  
しかも子どもといふのは、身体接觸が好きですから握手をした  
り、肩に手をかけたり。これもね、心をこめないとダメなんで、  
ハイ次、ハイ次の握手ではいけません。本当に“あしたね”とい  
う心をその点に托してお別れをする。こういうことは保育者とし  
て必要なことだとと思うのです。

### 幼稚園教育要領

私自身の子どもとのつきあいの中から、勝手に倉橋先生のお言  
葉とつなげて申し上げているので申し訳ないような気もいたしま  
すが、やはり本当に子どもと接する姿勢を作り上げて行かなけれ

ば、本物の保育はできないのではないかことなのです。ところが残念なことに昭和三十一年、保育要領が教育要領に改訂され  
た時点から、倉橋先生の保育に対するお考えは、なしくずしく  
すべて行つたのだと思います。その時は、すでに先生は逝かれて  
いました。それ以前の幼稚園や保育所の先生方は、倉橋先生から  
いろいろと教えていたいたいて、頭の中にはスッと倉橋先生が残  
つていたものです。ところが、残念ながら、昭和三十年台の幼稚  
園ブームの時期において、本当に幼児と接觸してきた人は、ひと  
つかみほどの数になつて、そして日本の幼児教育界は小学校みた  
いになつてしまつた。大変失礼な方ですが養成校において  
も、本当に子どもを知らない先生方が幼稚園や保育所の先生方の  
養成をやる。その結果、今日のような幼児不在の教育が多くなつ  
てしまつたというのが現状であります。

実は六領域が作られたのが昭和三十一年ですが、倉橋先生が生  
きて活躍しておられたなら、お元気だったら、こういうことには  
ならなかつたと思うくらいであります。この時点では、山下先生  
もあまり関係しておられなかつたということです。本当に幼児教  
育をささえてきた人たちが三十一年の幼稚園教育要領判定の時に  
は参加しておられなかつたのです。その前の二十二年の「幼稚園  
保育要領」の時の柱には領域などではなく、遊びが三つも入つてお

ります。自由遊び、劇遊び、じっこ遊びです。遊びという言葉が消えたのが、三十一年の幼稚園教育要領です。すなわち、子どもから「遊び」をうばつたのではないか、とさえ言いたいのです。しかし、教育要領にも眞の幼児教育への願いがこもつてゐることを、私、最近発見いたしました。それは、「芽ばえ」という言葉が十三ヵ所も書かれているのであります。芽ばえ、芽ばえ、芽ばえ、といつているのは「花を咲かせてはいけませんよ」といつているのです。ところが、このごろの幼児教育は、花を咲かせようとしているのですから、幼稚園教育要領に違反していると言ふべきであります。

それからもう一つ非常に大きなことは、幼稚園教育要領には「のびのび」という言葉が十一ヵ所でできます。子どもがのびのびしていい保育はいけない保育です。ところがこのごろの幼稚園では、子どもがのびのびしてなくとも、まとまつて何かができた方がいい評価を受けています。そのような保育では、子どもひとりひとりの目はうつろな目をしています。実は、子どもの学科では、三年がかりでまなざしとか、表情とか、生き生きとしたという子どもの姿をとらえる方法を考えています。これらが集団生活の中でどのように実現されているか、社会化とどう結びつくかという研究を始めています。ともかく、子どもが生き生き

てるかどうか、のびのびしているかどうか、そういうふうなことを判断するための基準を作らなければならぬ。私のように医学を勉強してまいりました者には、それらを何かの機械で測定したいわけです。ところが人間の心をそういうふうに測るわけにはいかないものだということを、このごろしみじみ思つております。何かスケールを作つて、子どもを右か左か真中かに判別しようとすると科学はすべきでないということをいいたいのです。しかし、科学を推進していかなければ、ただ主観的なものに終わつてしまひます。その点で、どのように保育を評価したらよいかを皆さま方と一緒についていかなければならないと思つています。

倉橋先生の時代には、まだ児童心理学がようやく展開を始めた頃で、先生は、はつきり学問と保育とを分けて考えていらっしゃいました。それが山下先生のお話にありましたように、保育学会設立の時におつしやつたお言葉、「科学的な機構を」というお言葉になつたのだと思います。私はこのことは初めて今日うかがつたのですが、倉橋先生は、徹底的に子どもを理解するためには、「学問」というものは、保育の実践には及ばないよ」とおつしやつづけていらしたのではないかと思つておりました。

## 立場を逆にする

昭和二十八年ごろのことです。先生はすでに脳軟化の傾向がありになつたのではなかつたかと思えるのです。先生がその病気でお亡くなりになつたので、私が勝手に結び付けているのかどうか、はつきりしないのですが、二階にあつた先生のお部屋に入りますと、いきなり「平井さんね、地球を逆さに持つたらどうなるでしょうね」とおっしゃつたのです。「逆さに?」とびっくりしましたし、「少しおかしいんじやないかな」と、不安に思つたほどです。ところが、帰りの夜道でそのお言葉を考えました。そのころはまだあまり自動車がなくて、ぶらぶら歩いて帰れたころです。突然、はつと思つた。「『発想を逆にしたらどうなるだろうか』ということを先生は私に教えて下さつたのではないか」と。反対の側に立つて発想したらどうなるだろう。つまり、これをもう少し限定して言えば、私たちは、つい大人の考案でもつて子どものことを見る。これを子どもの立場で見たらどうなるだろう。いろいろの従来言われてきたことを逆にしてみると、どう見ても見るならば、もう一步進めて考えることができるのではない。このことを私自身は忘れていたように思つたのです。今、私たちにある問題が起きるとしますと、それを従来の公式とは全然

逆な考え方で見たら一体どうなるかというふうな発想を必ず持つてみる必要があると思いました。

倉橋先生に教えていただいた方々は、ノートを取つておいでになりました。先生がお話しになつたもののいくつかは、「幼稚園真諦」や「幼稚園雑草」の中にものつていますが、学生に対する先生の講義は非常におもしろかったのではないかでしょうか。おもしろい講義は、実はノートが取れないことがしばしばです。あるいはいたずら書きのようなノートになつっていてもよいのです。ノートを集めても先生のお話の味わいを出すことができると、先生の心の奥を見ることができるのでないかと思うのです。私の思い出は非常に断片的であり、先生とのおつき合いも先生の晩年でありますから、本当のおつき合いをしたとは言えないであります。

倉橋先生と同様に、私の心にともしうとなつてゐる先生や先輩として、何人かの方々がいるのですが、それはよく味わつてみなければわからないことをおっしゃつて下さつた方々でございます。そのお一人で、私の心のともしうにしております小児科の佐藤彰先生は、この方も数年前にお亡くなりになつたのですが、講義をなさるときに、一言だけぽつんと言つて帰られるという具合でした。たとえば、「皆さん、病気になりなさいよ。入院しなさ

いよ」とほんと言われる。「人を馬鹿にしている」と怒った人もありました。先生の真意は「病気をしたり入院することによつて患者としての体験が得られて、患者の心になつて考えてあげることができる。それでなければ、医者になつても傲慢な医者になつてしまふ」ということをおっしゃつていたのです。医学部には、臨床講義というのがあります。これは、たとえば白血病とか、脳性麻痺であるとか、病気の子どもを連れてきて、学生に見せると共に、当たつた学生が自分自身でその子を診察して、診断をつけ、評価を受けるのであります。ところが先生の臨床講義には、時々全く健康な子どもが出されるのです。学生にさんざんに診察をさせておいて、最後に「これはノーマルな子どもであります」といつて帰られる。学生の中には「馬鹿にしているじゃないか」と言つた者もありました。しかし、先生は、本当に正常な子どもの認識を持つことによって初めて病気の子どものことがわからることを教えたと思うのです。今日、正常な子どもを知らない医者によつて健康であるにもかかわらず病気の子どもにされたという例が少くありません。そもそも、正常と異常の鑑別をどうするかは、子どもひとりひとりによつてちがつてくる面があり、一部を見る見方や病気ではないかと思つて見る見方は、誤りを犯すことが多いのです。子どもを見る目的確立は、実際に大切で

あると思いますし、倉橋先生はその目を養つて下さいました。いろいろ申し上げましたが、先生の児童觀には、子どもは自分で自身の力で発達するという考え方立つておられたと思います。子ども自身で発達する力は、自分で子どもとよく接觸してみるとよつてのみ、直観的にわかるのです。子ども自身で発達する力は自主的な行動に現われますから、それを援助、補助するのが保育者の役割であり、それが「園」という先生のお言葉に現われております。「芽ばえ」にそつと水をかけてあげたり、周囲の土をやわらかくしてあげたりすればよく、それによつて子どもは自分から発達します。つまり、発達に対する信頼を寄せるか否かによつて、保育者の態度は決まつてくる面があります。子どもといふのは馬鹿な者であり幼稚な者で「この子どもに私が教え込まれなければ、伸びないので」という考え方があれば、それは傲慢な先生の言うことだと思います。

幸いに、保育界においては、昔から「子どもの目の高さになりなさい」という教えがあります。子どもの目の高さになるため、しゃがまなければなりません。私は子どもとつき合う時には必ずしゃがみます。ところがこの年になりますと、からだがだんだん下り坂なものですから、しゃがんでいることは大儀になり、腰が痛んだりします。按摩がだんだん値上がりしてくるのですから

そうはかかれない。そこで近ごろ「あぐら保育」、「寝そべり保育」を考え出したのです。子どもがしゃがんで遊んでいる時は、寝そべって子どもの目を見ている時に、一番よく子どもの心がわかります。目がいきいきしているかどうかがわかります。私は死ぬまで子どもと付き合いたいと思っていますから、あぐらや寝そべりは、「保育の保育」にとつては非常によいのです。保育の保育は寝そべり保育ということにしたいと考えているのです。

### 私と子ども

私に子どもの本質を教えてくれたのは諸先輩ですが、子どもを本当にわかるようになったのは子どもとの合宿を始めてからでしょうか。初めは幼児も連れていったのですが、やはり幼児に六泊七日の合宿は無理なのでやめ、小学校一～四年を対象にしました。この方の合宿には、ルールはございません。子ども自身で考えて

自由に活動することができるわけです。十年前までの合宿では、子どもは自分で考えて行動し、活動がありました。ところがこのころは、子どもに活動をまかせてみますと、どう行動していくかわからぬという子どもがふえています。自主性が育っていないのです。本当に情ない思いがします。反対に、まかせられると実にいきいきと活動し、子どもなりに自分の力を伸ばす子どももいます。

そこでよい子の「評価」をどういう尺度にもとづいて子どもをよい子と評価しているかについて検討しなければなりません。私は、子どもの評価をする人たちに対し、まず自分を評価しないということをいつています。あるいは、先生の方を先に評価しておいて、子どもを評価する。さもないと、とんでもない身勝手な評価になると 思います。また、幼児教育というのは、幼児を対す。その力が發揮されるように、保育者が援助することが大事だと思うのです。ところが最近の幼稚園の多くが大変な状態に陥っています。詰めこみ教育がそれです。詰め込み主義の小学校に合わせたような教育をして、わくにはめようとしています。それに従っている子どもは、自分で考える力が育ちませんから、思春期以後、つまり、中学校や高校へ行って爆発的に異常な行動を現わすことになり、そのような子どもがふえています。先日も、登校拒否で困っている中学二年生の男の子のご両親が相談に見えました。すでに二歳半の時に、その子は鉛筆とノートを持って幼稚園へ行くといつてきかなかつたそうです。その時三年保育に入れてもらい一斉保育や文字指導を受け、保育者の言うことをきいたので大変いいお子さんだといわれ、親ごさんも満足し切っていたのだそうです。ですから、登校拒否になったのがわからないと言つていました。

象としておしまいになってしまい、小学校以後の状態が実際どうなっているか、わからない。私は、もし先生が子どもと生涯つきあうつもりで、本当に子どもを大事にして下さるならば、個性がよく見つかるし、それを伸ばすことができると思います。

私にとって大変うれしいことに、年をとつてまいりますと、一世を見るようになりました。過去において可愛らしかった子どもたちが、お父さんやお母さんになつて現われてくるのです。本当に子どもを可愛いがってきますと、それらの子どもたちの心に私が残っているのかと思うと、うれしさがこみ上げてきます。

私が園医をしておりました関係で、三歳の時からつき合つていた子どもがいます。物すごくいたずら子でしたね、ツベルクリ

ン反応の時など、ならべてある注射器をガチャガチャッとひつくり返したり、窓から園庭に飛んだり、屋根のぼったり——ともかくいたずらっ子なのです。小学校へ行つてからも同じようで、先生からさんざんにやられ、母親はたびたび呼び出されました。この子どもを、先ほどお話をしました合宿に連れて行きました。そして、現地へ着きましたと、さつそく他の子どもたちを集めまして、「おれたちはな、ひらいの実験材料になつてるから、注意しろ!」などといい、全く閉口しました。そのときどきに、お

母さんから相談を受けていましたが、中学生のころから関係が薄

くなりました。ところが、一昨年、突然私の前に現われて、結婚式にぜひ出席してくれと頼みにきたのです。私は非常に感動し喜んで出席することにしました。ところが、テーブル・スピーチをしてほしいというのです。それには困りました。結婚式のスピーチは、本人のいい点を言わなければならない。それはとても無理です。(笑い) かんにんしてほしいといつたら、彼は、"ありのまのぼくについて言って下さっていいんです"って言うのです。それならたくさんに材料があるというわけで承知したのです。彼のことを思い返してみると、すごいいたずらではあつたけれども、いい面があるのです。ですから子どもを狭い見方で見てはいけないということなのです。

今日は、倉橋先生にちなんで身勝手なことを申し上げてしましました。倉橋先生は、地下できいていらして『平井のやつは勝手なことをいつてる……』なんておっしゃつているかもしませんし、もう一度、『地球をさかさにもちなさい』なんておっしゃるかもしれません。とにかく偉大な方でした。まだまだ理解できません。しかし、倉橋先生のことは私が死ぬまで叫びつづけていきたいと思います。皆さま方もどうぞ保育界のもうぐりにならないように、倉橋先生のお書きになつたものをくり返しきり返し読みになるよう、おすすめします。(四九・三・三〇)